



2011年(平成23年)4月に地方独立行政法人りんくう総合医療センターが設立されて、今2021年4月で10周年となった。この度、10周年記念として、この10年間における当センターの臨床的・学術的業績を振り返って、その記録を残すために記念誌を発行することとなった。詳細は本文に譲るが、この10年間の歩みについて少し振り返ってみたい。

りんくう総合医療センター市立泉佐野病院という市民病院から独立行政法人化したことを契機に、人事面ではより柔軟性のある運営が可能になり、大阪大学や近畿大学、和歌山県立医科大学とも連携して、特に不足している診療科の医師を充実させることができた。幸いにも、大阪府地域医療再生計画「泉州医療圏」において、泉州南部の公立病院(市立貝塚病院・阪南市民病院・りんくう総合医療センター)の医療機能の底上げへの取り組みが重点的施策として位置づけられた。そのための基金として25億円が交付され、市立貝塚病院と連携して地域医療を活性化させるために、2012年4月に大阪大学に総合地域医療学寄附講座が開設され、以降は講座に属する助教による診療支援を通じて大学との緊密な関係性を深めることができた。

2012年には八木原俊克理事長が就任され、2013年1月からは小生が大阪大学大学院総合地域医療学寄附講座の教授を拝命した。2013年4月には大阪府立泉州救命救急センターが大阪府から移管され、りんくう総合医療センターに統合された。2015年2月には上記の基金を元にりんくう教育研修棟を建設し、その一部として泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウイズ)を開設し、医師、看護師を含む医療関係者の教育のためのシステム作りがなされた。その後、2015年8月には第九代院長として、総合地域医療学寄附講座教授と兼任で小生が当センターへ赴任することとなった。

赴任後、小生は弱体化していた内科系診療科の活性化をはかり、常勤医ゼロであった消化器内科に加え、大阪大学や和歌山県立医科大学と協調して、甲状腺を含む糖尿病・内分泌代謝内科、循環器内科、脳神経内科、腎臓内科の専門医を充実させ、更に外科系では消化器外科、呼吸器外科、心臓血管外科の人事刷新による診療のレベルアップをはかった。一方、泉州地域では健診受診率が低く、癌や脳心血管病による死亡率が全国的に見ても高いことから、未病の段階から疾患を予防していくことの重要性が推察され、2018年4月より大阪大学から増田大作先生をりんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)センター長及び健康管理センター副センター長として招聘するとともに、臨床検査部、放射線部、CE部門等においても外部からの人材の強化を図った。

一方、当センターは重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備えて設立された、我が国に4つしかない特定感染症指定医療機関であり、新興感染症の防波堤という重責も担っている。2019年末から世界に蔓延が始まった新型コロナウイルス(COVID-19)感染者の診療に関しても、初期の段階から関西空港検疫所経由の外国人旅行者の診療に当たり、2020年3月からPCR、LAMP法、抗原定性・定量法、抗体検査などを全国に先駆けて導入し、院内感染やクラスター防止のための対策を行ってきた。更に、大阪府や近隣地域から重症・中等症の患者や外国人患者、COVID-19疑い肺炎患者を多数受け入れ、泉州地域住民の命を守るための最後の砦として病院一丸となって対応してきた。2020年7月、八木原俊克理事長から小生が理事長に、松岡哲也先生が第十代院長に就任したが、COVID-19の流行による風評被害や受診控えもあって医業収益は以前に比べて下がっており、予断を許さない状況が続いている。しかしながら、COVID-19感染症は診療科の垣根を越えて一丸となって対応するという病院の新たな方向性をもたらすことにも繋がった。今後、ワクチンの反復接種が開発された新薬の応用によって、入院や重症化が抑制され、人類がCOVID-19と共存できるウイズコロナの時代が早く来ることを期待する。

独法化10年を経て、我がRinku General Medical Centerは国内はもとよりグローバルにも有名な病院への変貌を遂げつつあり、学生の見学希望者も殺到する人気病院となってきている。泉州地域の住民の方々や当院職員が誇れる病院として、りんくう総合医療センターの世界へ向けた今後の更なる発展を祈念したい。